



TITLE:

京大広報 No. 719

AUTHOR(S):

京都大学企画・情報部広報課

---

CITATION:

京都大学企画・情報部広報課. 京大広報 No. 719. 京大広報 2016, 719: 4565-4584

ISSUE DATE:

2016-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209112>

RIGHT:



# 京大広報

No. 719

2016.2



医学部附属病院新病棟「南病棟」ヘリポートで患者搬送訓練を実施 —関連記事 本文4580ページ—

## 目次

群れない京大生の「京大生らしい群れ方」 副学長 徳賀芳弘……	4566
<b>〈大学の動き〉</b>	
平成28年度概算要求内示概要……	4568
平成28年度入学者選抜学力試験(個別学力検査) の志願状況……	4571
平成27年度定年退職予定教員……	4572
副学長事務代理が発令される……	4574
<b>〈部局の動き〉</b>	
医学部附属病院「南病棟」完成記念式典を挙行 ……	4574
東南アジア研究所創立50周年記念式典・記念祝 賀会を開催……	4575
<b>〈寸言〉</b>	
自由な学風を謳歌しながら、幅広く社会にも 目を向けよう 高松 富也……	4576
<b>〈随想〉</b>	
「はたらき」の尊厳さ 名誉教授 本山 美彦……	4577
<b>〈洛書〉</b>	
研究生生活における時間の使い方 木野村 淳……	4578

<b>〈栄誉〉</b>	
竹内 理 ウイルス研究所教授が日本学士院学術 奨励賞を受賞……	4579
植村卓史 工学研究科准教授が日本学術振興会賞 を受賞……	4579
松本 紘 前総長がフランス共和国レジオン・ド ヌール勲章シュヴァリエを受章……	4580
<b>〈話題〉</b>	
医学部附属病院新病棟「南病棟」ヘリポートで患 者搬送訓練を実施……	4580
宇治地区新年互礼会を開催……	4581
京都大学パートナーシップオフィス(マヒドン大 学)開所式および留学セミナーを開催……	4581
講演会および施設公開「スーチャーさんと京都」を 開催……	4582
国際会議 SEASIA 2015を開催……	4583
湊 長博 理事・副学長が第13回佐川特別賞を 受賞……	4583
<b>〈計報〉</b> ……	4584

## 巻頭言

群れない京大生の  
「京大生らしい群れ方」

副学長 徳賀 芳弘

平成27年10月1日より、京大基金と同窓会担当の副学長をしている、徳賀です。部局では、経営管理研究部(10年目)と経済学研究科(14年目)で会計科目を教えています。専門領域は、財務会計、企業分析、国際会計等です。

専門についてのお話は別の機会にすることといたしまして、まず、同窓会についてのお知らせとお願いをさせていただきます。全学の京大同窓会は、9年前の平成18年に発足しましたが、その際には全部で52組織でした。現在は、学部・研究科の同窓会が48組織、国内地域同窓会が28組織(19道府県)、国外地域同窓会が28組織、学生サークル系が4組織、東京支部連絡会を含めまして、109組織と、この9年間で倍増かつ充実してきました。しかし、まだ多くの空白地域があります。国内では、卒業生が気軽に近くの同窓会の集まりに出席できるように、47都道府県すべてを網羅できるような地域同窓会の組織化が望ましいと考えております。また、国外では、とりわけ、アジア地区での組織化が進んでおりますが、世界で空白の大陸がないよう組織化ができればと考えております。もちろん、組織作り自体が目的ではありません。卒業生の皆様が各地で情報交換をし、活躍のシナジーとしていただきたいことや、京都大学の存在を身近に感じていただき、「大学が困っているのであれば助けてやろう」という気持ちを持っていただくことが重要であろうと考えています。そのためには、京都大学と卒業生との距離を近づけなければならず、双方向のコミュニケーションが必要不可欠です。本部同窓会事務局は卒業生の活躍についての情報を様々な方法で入手して皆様に発信すると共に、大学のホームページや発行物等の充実を図



り、京都大学が現在取り組んでいることやイベントの情報、あるいは、地域同窓会・総会等の開催についてのニュース等を掲載いたしております。皆様、是非同

窓会のHP(<http://hp.alumni.kyoto-u.ac.jp/>)をご覧くださいと思います。また、10年前の平成18年より年に一度「ホームカミングデー」を開催いたします。統一テーマを決めて様々なイベントを企画し、卒業生や在学生の皆様に楽しんでいただけるように工夫を凝らしておりますので、卒業後には是非ご参加いただきたくお願いいたします。

さて、同窓会や基金関係で挨拶に何うと必ず言われるのは、「京大生は群れないので、このような組織作りには向かない」という趣旨のお話です。確かに、人が「群れている」(徒党を組む)姿を見て見苦しく感じる場合もありますので、「人の振り見て」やめようという気持ちが働くことがあるでしょうし、別の視点からみれば、「群れない」という見識は、一人でも傑出した活躍ができるという京大生の「誇り」に近いものかもしれません。受け売りですが、文化人類学者のホール教授(Hall, E. T.)が、各国で、また親密度やシチュエーションで、人々の感じる「心地よい距離」が異なっているという分析をしています。イタリアやスペインでは、友人(親密度によりますが)を自分の体の近くに置くことが「心地よく」感じられるようですが、ドイツや日本では手を伸ばした以上の距離を保ちたいと感じるようです。つまり、日本人はそもそも一定の「心地よい距離」を保ちたいと感じるようです。ホール教授によれば、それらの相違は文化に根ざしているとのことですから、日本人の中でも異なる文化を持つ人々の間では、「心地よい

距離」が相違していることも十分に考えられます。また、このようなことは、「関係性の距離」についても言えるかもしれません。「群れない」という見識は、非常に親しいわけではなく、非常に縁遠いわけでもない間柄についてのものかもしれませんが、その人間関係にも「心地よいと感じる距離」が必ずあると思います。わたしは、昨年、広島同窓会の年次総会に出席して、非常に面白い集いをされているお話を聞きました。広島京大では、毎月一度、集まる日時のみ決めて、事前に出席も取らず、誰がその日の話者であるかも決めず(それでも誰かが何かについて話し始めるそうです)、集まりたい人だけが集まってその日に食べたいものをそれぞれが注文し、討論をしているそうです。それでも毎回多数の人が集まり、東京(以前の広島居住者ですが)からも参加されているようです。これは、「京大生らしい群れ方」の一つの形なのかもしれません。もちろん、これしかないというのではなく、こんな集まり方もありますねというもののなのですが……。それにしても、「群れない」でも国際社会において図抜けた活躍をしている京大卒業生たちが本気で「群れれば」、どうなるのだろうかということにも興味があります。

続いて、京都大学基金についてのお知らせとお願いです。京大基金は、平成19年に京都大学が国立大学法人となった後の財政基盤の強化を目的として設立されたものでした。文科省からの運営費交付金が昨年まで平成27年を除いて11年にわたって毎年減額されている中で(11年前と比べますと本年度の運営費交付金は120億円弱減額されています)、京都大学が世界のリーディング大学として研究・教育の水準を維持・強化し、卒業生の皆様が誇れる大学であり続けるためには、外部からの寄付は不可欠なものとなっております。ここ3年間の寄付金の推移を見ますと、年々大きく上昇しており、京大にも僅かずつですが「寄付文化」が醸成されつつあるようです。それでも、18万人程度と言われる卒業生数でありな

がら、ご寄付をいただいた方は1000人にも満たないという寂しい状態です。6年後の平成34年に京都大学創立125周年を迎えますので、今年の4月頃より募金活動をスタートする予定です。また、この125周年の募金活動を契機として、京大に「寄付文化」を育むことができたらと考えています。「寄付文化」を育むためには、同窓会組織と同様に、卒業生、父兄、企業、および地域住民と大学との双方向の情報発信が必要と考えております。卒業生等の皆様に、大学が何をしているか、何をしようとしているか、とりわけ、寄付をどのように有効に使っているかを知っていただき、様々な次元で大学と皆様との距離を縮めて行かなければなりません。そのための一つの手段といたしまして、昨年より「京大基金ニューズレター」というものを作成いたしております。既に、2号ほど発行いたしまして、地域の同窓会等で配布していただいておりますほか、各同窓会の会報に同封いただき卒業生の皆様にご送付いただいております。また、寄付者に寄付をしてよかったと思っていただくために、一定額以上の寄付者の皆様を対象に「感謝の集い」を開催し、総長をはじめ大学の教職員と懇親を深めていただいたり、専門分野を超えて関心を共有できるテーマの講演会に出席していただくなどの機会を設けています。

また、最近の基金関連の活動についてご報告いたしますと、平成27年7月より「学生チャレンジコンテスト」という学生支援事業を進めておりまして、3月15日まで「クラウドファンディング」の仕組みも活用しながら広くご寄付を募る予定です。学生からは26件の企画が出てまいりましたが、コンペを勝ち抜いた6件の研究企画は京大基金のホームページ(<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/>)でご覧いただけます。教職員の皆様も、学生チャレンジコンテストを通じて、「挑戦する京大生」へのご支援をぜひともよろしくお願いいたします。



## 大学の動き

## 平成28年度概算要求内示概要

## 1. 大学院・学部組織整備計画

1. 法学研究科 法政理論専攻  
経営管理教育部 経営管理専攻(専門職大学院)  
経営科学専攻

修士課程 6人, 博士課程 △6人  
修士課程 △10人  
博士課程 7人

## 2. 機能強化経費

## 機能強化促進分:

- ・本学は、三つの重点支援の枠組みより、重点支援③(主として、卓越した成果を創出している海外大学と伍して、全学的に世界で卓越した教育研究、社会実装を推進する)を選択。本学の機能強化の方向性に応じた取組構想として、下記の四つの戦略、22件の取組からなる機能強化の取組構想が採択された。

戦略①: 独創的な先端研究・融合研究の推進による学術・社会のイノベーション創出

(組織整備1件, プロジェクト9件)

戦略②: 学生に主体性の発揮と質の高い学修を促す国際通用性の高い教育システムの構築

(プロジェクト5件)

戦略③: 世界標準の教育研究環境の構築と多様なグローバル人材育成(組織整備1件, プロジェクト5件)

戦略④: グローバル化に対応した産官学連携及び最先端で質の高い医療の開発・提供による社会貢献事業の推進(プロジェクト1件)

- ・国立大学改革強化推進事業分 1件が採択された。

- ・入学者選抜改革分 1件が採択された。

## 【参考】機能強化の取組構想 イメージ

将来構想 (WINDOW構想)			
総長のリーダーシップによる学内改革の推進 ・教育研究組織改革(学域・学系制の導入、研究連携基盤) ・人事・給与システムの弾力化(年俸制、クロスアポイントメント制度の導入) ・IRを活用した大学運営 ・特色入試の実施 等			
第3期における機能強化の方向性(重点支援③)に応じた取組			
【戦略①】 独創的な先端研究・融合研究の推進による学術・社会のイノベーション創出	【戦略②】 学生に主体性の発揮と質の高い学修を促す国際通用性の高い教育システムの構築	【戦略③】 世界標準の教育研究環境の構築と多様なグローバル人材育成	【戦略④】 グローバル化に対応した産官学連携及び最先端で質の高い医療の開発・提供による社会貢献事業の推進
<b>【評価指標】</b> <input type="checkbox"/> 異分野共著論文数を増加させる (H25: 877件→第3期末までに増加) <input type="checkbox"/> 若手研究者の海外派遣者数を増加させる (H25: 延べ1,383人 → 第3期末までに増加) <input type="checkbox"/> 科学研究費助成事業の採択状況を向上させる (H26→第3期末までに向上) <input type="checkbox"/> 研究支援体制を充実させるため、URA及び外国語力基準を満たす専任職員を増員する (URA H26: 40人→第3期末までに増加、外国語力基準を満たす専任職員 H26: 77人→第3期末: 120人に増加) <input type="checkbox"/> 未踏科学への取組等の推進により、新たな研究手法を開発する <b>■論文数・論文の被引用数や質の高い論文の状況</b> 【論文数や国際的に評価の高いジャーナル(TOP5%)への掲載論文数を増加させる (H26: 論文数 7,482件、掲載論文数 780件 → 第3期末までに増加)】 【人文社会分野のジャーナルへの掲載論文数を増加させる (H26: 301件 → 第3期末までに増加)】 <b>■国際共著論文の状況</b> 【国際共著論文数を増加させる (H26: 2,245件 → 第3期末までに増加)】 <b>■一定金額以上の共同研究・受託研究の実施状況</b> 【共同研究・受託研究実施件数を増加させる (H26: 共同研究 1,010件、受託研究 925件 → 第3期末までに増加)】	<b>【評価指標】</b> <input type="checkbox"/> 能動的学習への活用を進めるため、インターネットを活用したデジタル教材数を増加させる (H26: OCV 535件、MOOCs 1件 → 第3期末までに増加) <input type="checkbox"/> 学部における科目ナンバリングについては、導入率100%を実現する (H27: 7.5% → 第3期末までに実現) <input type="checkbox"/> 社会のニーズに応じた効果的な教育を行うため、部局横断型の教育プログラム数を増加させる (H27: 64科目 → 第3期末までに増加) <input type="checkbox"/> 社会人の学び直しに貢献するため、履修証明プログラム数を増加させる (H27: 3プログラム → 第3期末までに増加) <input type="checkbox"/> アクティブラーニングの手法を取り入れた少人数による課題探究型科目数を増加させる (H27: 197科目 → 第3期末までに増加) <input type="checkbox"/> 特色入試においては、追跡調査の結果をフィードバックしうえで、募集人員の見直しや特色入試の意図に合った人物が獲得できるように選抜方法を確立し、特色入試による入学者数を増加させる (H28 → 第3期末までに増加)	<b>【評価指標】</b> <input type="checkbox"/> 学士課程1・2年次を対象とする英語による基礎・教養科目については、H26: 134科目 → 第3期末: 400科目へ拡張する <input type="checkbox"/> 外国人教員増員計画として外国人教員数をH28.10月までに延べ282人に増加させ、それを維持する <b>■外国人留学生や外国の大学との交流状況</b> 【国際共同学位プログラム「ジョイント/ダブルディグリープログラム」について、事業を実施する6分野を中心に遂行し、H26: ダブルディグリープログラム 6件 → 第3期末までに増加させる】 【留学生受入れについては、優秀な学生の確保に努めるとともに、受入数を増加させ、外国人留学生数H26: 1,779人 → 第3期末: 3,300人(通年)に増加させる】 【中長期及び短期の海外留学者数を、H26: 1,517人 → 第3期末: 1,600人(通年)に増加させる】 【大学間学術交流協定締結を推進し、協定校数H26: 111校 → 第3期末: 200校超に増加させる】 <b>■外国の大学や研究機関等との共同・受託研究の状況</b> 【国際競争力のある海外大学等との国際共同研究件数をH26 → 第3期末までに増加させる】	<b>【評価指標】</b> <input type="checkbox"/> 海外企業との共同研究事業数を増加させる (H26: 共同研究 7件、受託研究 3件 → 第3期末までに増加) <input type="checkbox"/> 「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」において京都学教育プログラムを実施し、H26: 履修者数1,483人 → H29: 1,500人に増加させる <input type="checkbox"/> 診療情報等のデータベース化を推進するため、がんゲノム情報と時系列臨床情報の統合ビッグデータ登録件数を増加させる(ビッグデータを新たに構築し、第3期末までに登録症例数を500件とする) <input type="checkbox"/> 先端的医療の研究開発を推進するため、ゲノム医療の実装のための新たなガイドライン等を作成する (H26 → 第3期末までに増加(ガイドライン(0件) → 10件)、標準作業手順書(SOP)(0件 → 20件)) <b>■知的財産の実用化や企業等との特許の共同出願状況</b> 【社会実装につながる産官学連携の取組を推進し、知的財産収入額を増加させる (H26: 382,326千円 → 第3期末までに増加)】
※評価指標の凡例 □京都大学独自指標 ■文部科学省提示指標 【】内は、それに対する京都大学の評価指標			
<b>【主な学内の取組】</b> ▶ 海外派遣事業(ジョーンズプログラム) ▶ 次世代研究者育成支援(白南プロジェクト) ▶ 研究支援体制の整備(URA) ▶ 高等研究院の設置	<b>【主な学内の取組】</b> ▶ 入試制度改革(特色入試)の実施 ▶ OCV、MOOCs等ICTを活用した教育の充実 ▶ 国際高等教育院附属国際言語教育センター(i-AFRICI)による言語教育	<b>【主な学内の取組】</b> ▶ 海外派遣事業(ジョーンズプログラム) ▶ 海外全学拠点の設置	<b>【主な学内の取組】</b> ▶ 大学発ベンチャー育成事業 ▶ 国内外の企業や研究機関との組織対応型包括連携協定の締結 ▶ 京都・大学キャンパス計画
<b>【主な補助金の取組】</b> ▶ 研究大学強化促進事業	<b>【主な補助金の取組】</b> ▶ 国際高等教育院の設置及び学部等のグローバル化の推進	<b>【主な補助金の取組】</b> ▶ スーパーグローバル大学等事業 ▶ 博士課程教育リーディングプログラム「京大大学院国際修養館」	<b>【主な補助金の取組】</b> ▶ 活力ある生涯のためのLast 5X「1/4」への挑戦 ▶ KYOTO未来創造拠点整備事業—社会変革期を担う人材育成
<b>【重点支援の取組】</b> 関連する教育研究プロジェクト	<b>【重点支援の取組】</b> 関連する教育研究プロジェクト	<b>【重点支援の取組】</b> 関連する教育研究プロジェクト	<b>【重点支援の取組】</b> 関連する教育研究プロジェクト

共通政策課題分：以下，32件が採択された。

部 局 名	事 項 (事 業) 名
全国共同利用・共同実施分 【拠点認定に伴う経費】	
化学研究所	化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際グローバル研究拠点形成
人文科学研究所	人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点
再生医科学研究所	再生医学・再生医療の先端融合的共同研究
エネルギー理工学研究所	ゼロエミッションエネルギー研究拠点活動の強化
生存圏研究所	生存圏科学の共同利用・共同研究拠点機能の強化
防災研究所	自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究推進事業
基礎物理学研究所	基礎物理学の発展を目指す国際連携型全国共同研究
ウイルス研究所	ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点事業
経済研究所	先端経済理論の国際的共同研究拠点
数理解析研究所	数理解析共同研究と滞在型共同研究の推進
原子炉実験所	複合原子力科学の有効利用に向けた先導的研究の推進
霊長類研究所	霊長類研究を基にした国際共同研究拠点の推進
東南アジア研究所	東南アジア研究の国際共同研究拠点
放射線生物研究センター	放射線分子生物学の研究推進拠点
生態学研究センター	生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点の形成
地域研究統合情報センター	地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進
野生動物研究センター	生息地保全と環境教育を振興する野生動物研究に関する国際研究拠点
全国共同利用・共同実施分 【共同利用・共同研究プロジェクト分】	
化学研究所	統合物質創製化学研究推進機構
化学研究所 エネルギー理工学研究所 生存圏研究所	グリーンイノベーションに資する高効率スマートマテリアルの創製研究 —アンダーワンルーフ型拠点連携による研究機能と人材育成の強化—
エネルギー理工学研究所	革新的高効率太陽光利用技術の開発 —ゼロエミッション文明への変革を加速する—
生存圏研究所	生存圏科学の国際化とイノベーション強化
基礎物理学研究所	重力物理学の国際拠点形成
経済研究所	先端政策分析研究推進事業 —イノベーションの創出・活用により豊かな国民生活を実現する新経済社会システムの構築—

部 局 名	事 項 (事 業) 名
数理解析研究所	最先端数学の研究力を強化する新しい幾何学の創造 —数学における主導的地位の確立—
原子炉実験所	量子ビームと核科学の革新的複合利用による先端物質科学・分析研究拠点の構築
東南アジア研究所 地域研究統合情報センター	日 ASEAN 協働による超学際生存基盤研究の推進
東南アジア研究所	ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開 —東アジア共同体構想を支える理念と人的ネットワークの強化—
事務本部(企画・情報部(学際融合教育研究推進センター)), 文学研究科, 教育学研究科, 法学研究科, 経済学研究科, 人間・環境学研究科, 情報学研究科, 人文科学研究科, 経済研究所, 東南アジア研究所, こころの未来研究センター	エビデンス・ベース社会の構築に向けた人文社会科学の学際融合・最先端研究人材養成事業 —ニーズからシーズへ—
教育関係共同実施分	
フィールド科学教育研究センター	黒潮海域における海洋生物の自然史科学に関するフィールド教育共同利用拠点整備事業
フィールド科学教育研究センター	日本海における水産学・水圏環境学フィールド教育拠点形成事業
フィールド科学教育研究センター	人と自然のつながりを学ぶ森林フィールド教育共同利用拠点
資料の保存・修復等分	
附属図書館	京都大学附属図書館所蔵「富士川文庫」保存・公開のための修復・電子化事業 —わが国の医学の歴史を俯瞰する研究基盤構築のために—

### 病院特別医療機械設備(財政投融資設備)

部 局 名	事 項 (事 業) 名
医学部附属病院	浅在性リニアック放射線治療システム
医学部附属病院	血液透析統合モニタリングシステム
医学部附属病院	迅速検査報告診療支援システム

(財務部(財務課))

## 平成28年度一般入試(法学部後期日程(特色入試)含む)の志願状況

平成28年度一般入試(法学部後期日程(特色入試)含む)の志願状況は以下のとおりである。

志願票の受付は、1月25日(月)から2月3日(水)まで、各学部で行われた。

なお、試験の日程は「前期日程」が2月25日(木)から2月27日(土)、「後期日程」は3月12日(土)となっている。

学 部		募集人員	受入学生数 (目安)	志願者数	倍 率	(参考) 前 年 度 最 終			
						募集人員	志願者数	倍 率	
総 合 人 間 学 部	前 期	115 <sup>△</sup>		518 <sup>△</sup>	4.5	120 <sup>△</sup>	412 <sup>△</sup>	3.4	
	文 系	62		283	4.6	65	231	3.6	
	理 系	53		235	4.4	55	181	3.3	
文 学 部	前 期	210		614	2.9	220	617	2.8	
教 育 学 部	前 期	54		183	3.4	60	195	3.3	
	文 系	44		144	3.3	50	148	3.0	
	理 系	10		39	3.9	10	47	4.7	
法 学 部	前 期	300		821	2.7	320	746	2.3	
	後期(特色入試)	20		324	16.2				
経 済 学 部	前 期	205		610	3.0	205	549	2.7	
	文 系	180		478	2.7	180	424	2.4	
	理 系	25		132	5.3	25	125	5.0	
理 学 部	前 期	306		845	2.8	311	861	2.8	
医 学 部	前 期	229		621	2.7	250	677	2.7	
	医 学 科	前 期	102		330	3.2	107	328	3.1
	人間健康科学科	前 期	127		291	2.3	143	349	2.4
	看護学専攻	前 期	60		137	2.3	70	167	2.4
	検査技術科学専攻	前 期	37		87	2.4	37	104	2.8
	理学療法学専攻	前 期	15		41	2.7	18	39	2.2
	作業療法学専攻	前 期	15		26	1.7	18	39	2.2
	薬 学 部	前 期	77		218	2.8	80	201	2.5
薬 科 学 科	前 期	47		132	2.8	50	111	2.2	
薬 学 科	前 期	30		86	2.9	30	90	3.0	
工 学 部(注4)		前 期	945		2732	2.9	955	2760	2.9
地 球 工 学 科		前 期		182	342	1.9	185	409	2.2
建 築 学 科		前 期		80	312	3.9	80	276	3.5
物 理 工 学 科		前 期		235	822	3.5	235	796	3.4
電気電子工学科		前 期		125	359	2.9	130	377	2.9
情 報 学 科		前 期		88	339	3.9	90	321	3.6
工 業 化 学 科		前 期		235	558	2.4	235	581	2.5
農 学 部		前 期	297		867	2.9	300	923	3.1
前 期 合 計		2738		8029	2.9	2821	7941	2.8	
後 期 合 計		20		324	16.2				

(注1) 法学部と経済学部(文系)の募集人員は、外国学校出身者のための選考各10名以内を除く。

(注2) 工学部地球工学科の受入学生数(目安)は、外国人留学生を対象とした国際コースのための選考による入学手続者14名を含む。

(注3) 特色入試入学手続者による最終的な一般入試(前期)の募集人員数は、2月18日に本学ホームページ上で発表しました。

(注4) 工学部の学科別志願者数は、第1志望学科の数を示す。

(教育推進・学生支援部(入試企画課))



## 平成27年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員64名(教授55名、准教授5名、講師1名、助教3名)が本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文 学 研 究 科	服 部 良 久	歴史文化学専攻 西洋史学講座	西洋中世の政治と社会に関する研究
〃	田 窪 行 則	行動文化学専攻 言語学講座	理論言語学の研究、琉球諸語の記述、消滅危機言語の記述・維持・再生の研究
〃	永 井 和	現代文化学専攻 現代文化学講座	近代日本の政軍関係に関する研究、日中戦争の軍事外交史的研究、大正・昭和期の天皇・元老・宮中研究
教育 学 研 究 科	子 安 増 生	教育科学専攻 教育認知心理学講座	認知発達過程の心理学的研究
〃	松 木 邦 裕	附属臨床教育実践研究センター	臨床精神分析学・対象関係論での転移に関する研究 Bion, Wの精神分析理論の解明と臨床応用
理 学 研 究 科	中 村 卓 史	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙放射学講座	「宇宙物理学の研究」特に一般相対性理論が重要になる重力波源の理論ならびに観測者との共同研究
〃	疋 田 努	生物科学専攻 自然史学講座	爬虫類の分類学、系統学、生物地理学、方言地理学に関する研究
〃	西 村 いくこ	生物科学専攻 分子植物科学講座	植物の細胞内膜系の動態と機能に関する研究
〃	井 上 敬	生物科学専攻 分子植物科学講座	細胞性粘菌の形態形成および細胞間相互作用の研究
医 学 研 究 科	藤 田 潤	医学専攻 遺伝医学講座分子病診療学	温度ストレスの医学・生物学的意義に関する研究 癌の分子医学的研究
工 学 研 究 科	田 村 正 行	社会基盤工学専攻 空間情報学講座	衛星リモートセンシングによる災害監視と環境保全に関する研究
〃	谷 口 栄 一	都市社会工学専攻 ロジスティクスシステム工学講座	ITSを活用した効率的かつ環境に優しい都市物流システムに関する研究
〃	松 岡 謙	都市環境工学専攻 環境システム工学講座	地球環境問題に関する研究 環境統合評価モデルの開発 環境システム工学に関する研究
〃	鈴 井 修 一	建築学専攻 建築環境計画学講座	人体の温熱生理を考慮した住宅の温湿度環境形成と文化財保存を中心とする温熱環境の設計と制御に関する研究
〃	門 内 輝 行	建築学専攻 建築環境計画学講座	建築・都市のデザインに関する記号学的研究 デザイン方法論の研究 環境における行動・認知に関する研究
〃	岸 和 郎	建築学専攻 建築設計学講座	建築設計、都市・建築空間の形態分析
〃	青 木 一 生	機械理工学専攻 流体理工学講座	分子気体力学の研究
〃	小 森 悟	機械理工学専攻 流体理工学講座	乱流輸送現象と環境流体力学
〃	斧 高 一	航空宇宙工学専攻 航空宇宙基礎工学講座	電離気体工学、特にプラズマ・固体表面相互作用及び宇宙推進工学、特にプラズマ・イオン推進機に関する研究
〃	伊 藤 秋 男	原子核工学専攻 量子ビーム科学講座	量子ビーム科学(原子衝突物理学・放射線物理学)に関する研究
〃	杉 本 純	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	軽水炉のシビアアクシデントに関する研究
〃	白 井 泰 治	材料工学専攻 材料プロセス工学講座	金属材料物性の研究、特に陽電子消滅法を用いた結晶格子欠陥の高精度計測とそれに基づく材料高機能化
〃	伊 藤 紳三郎	高分子化学専攻 高分子物性講座	高分子の光物理過程に関する研究 高分子超薄膜の構造・物性・機能の研究 高分子の光電子機能に関する研究
〃	高 岡 義 寛	附属光・電子理工学教育 研究センター	ナノ・クラスター・イオン工学と高機能材料創製に関する研究
農 学 研 究 科	河 原 太 八	応用生物科学専攻 資源植物科学講座	栽培植物の起源や近縁野生種の進化に関する研究、および近縁野生種の遺伝的多様性に関する研究
〃	奥 野 哲 郎	応用生物科学専攻 植物保護科学講座	植物RNAウイルスの複製と植物との相互作用機構に関する研究
〃	佐久間 正 幸	応用生物科学専攻 植物保護科学講座	昆虫の化学定位行動の行動生理学的研究
〃	祝 前 博 明	応用生物科学専攻 動物遺伝増殖学講座	資源動物の育種改良に関する統計遺伝学的研究
〃	鯨 坂 哲 朗	応用生物科学専攻 海洋微生物学講座	水産植物(海藻類・淡水藻類)の利用と分類及び生理・生態学的研究
〃	谷 誠	地域環境科学専攻 生物環境科学講座	土壌の水移動機構の解明に基づき、森林・林業が洪水・渇水緩和や気候維持に及ぼす影響を評価する研究

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
農 学 研 究 科	北 川 政 幸	附属牧場	環境調和型肉用牛飼養に関する研究
人 間 ・ 環 境 学 科	新 宮 一 成	共生人間学専攻 人間社会論講座	フロイトからラカンへと伝えられた精神分析の本質をめぐる臨床的探究と精神史へのその影響に関する研究
〃	高 橋 由 典	共生人間学専攻 人間社会論講座	体験選択を鍵概念とする社会的行為論の研究
〃	石 田 明 文	共生人間学専攻 思想文化論講座	ドイツ近現代思想史
〃	篠 原 資 明	共生人間学専攻 思想文化論講座	芸術に関する哲学的研究
〃	森 谷 敏 夫	共生人間学専攻 認知・行動科学講座	運動医科学, 応用生理学に関する研究
〃	宇 敷 重 廣	共生人間学専攻 数理科学講座	実力学系および複素力学系における特異現象に関する研究
〃	森 本 芳 則	共生人間学専攻 数理科学講座	解に特異性をもつ偏微分方程式の理論研究と, 非平衡気体運動論にあられるボルツマン方程式の数学解析
〃	松 浦 茂	共生文明学専攻 比較文明論講座	16世紀以降の東北アジア史に関する研究
〃	川 島 昭 夫	共生文明学専攻 歴史文化社会論講座	イギリス近代史(社会史・文化史・科学史), 特にイギリスおよび旧英領植民地における植物園の歴史の研究
〃	丸 橋 良 雄	共生文明学専攻 歴史文化社会論講座	1. 英国喜劇のドラマツルギーに関する研究 2. 比較文化論的視点から見た日英の女優の研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	荒 木 茂	アフリカ地域研究専攻 地域生態論講座	サハラ以南アフリカにおける生態環境と在来農業に関する研究
〃	梶 茂 樹	アフリカ地域研究専攻 民族共生論講座	アフリカ諸語に関する記述言語学的研究
情 報 学 研 究 科	岩 間 一 雄	通信情報システム専攻 コンピュータ工学講座	アルゴリズムの設計と解析及び計算量理論に関する研究
経営管理研究部	川 北 英 隆	経営管理講座	証券投資(株式, 債券, 証券化商品)に関する研究 証券市場(投資家, 仲介機関等)に関する研究
〃	曳 野 孝	経営管理講座	現代企業の長期成長パターンに関する国際比較研究
化 学 研 究 所	畑 安 雄	附属先端ビームナノ科学センター	タンパク質の立体構造と機能・物性の関係解明に関する構造生物学的研究
人文科学研究所	水 野 直 樹	文化連関研究部門	植民地期朝鮮の支配政策と朝鮮社会の対応に関する研究
生 存 圏 研 究 所	田 中 文 男	生存圏開発創成研究系	糖鎖工学並びに機能性多糖の分子設計に関する研究
防 災 研 究 所	田 中 仁 史	地震災害研究部門	鉄筋コンクリート構造の耐震設計・耐津波設計に関する研究
経 済 研 究 所	有 賀 健	経済戦略研究部門	労働経済学
数理解析研究所	森 重 文	基礎数理研究部門	高次元代数多様体の双有理幾何に関する研究
原子炉実験所	森 義 治	原子力基礎工学研究部門	加速器物理学に関する研究
〃	今 中 哲 二	原子力基礎工学研究部門	原子力災害にともなう放射能汚染, 被曝評価に関する研究 広島・長崎原爆による放射線被曝評価に関する研究
〃	福 永 俊 晴	粒子線基礎物性研究部門	中性子散乱を使った材料の構造に関する研究
霊長類研究所	毛 利 俊 雄	進化系統研究部門 進化形態分野	霊長類の頭蓋骨に関する研究
〃	松 沢 哲 郎	認知科学研究部門 思考言語分野	比較認知科学の研究
東南アジア研究所	松 林 公 蔵	人間生態相関研究部門	地域在住高齢者のヘルスケア・デザインに関するフィールド医学的研究: 本邦とアジアに関する国際比較研究
こころの未来 研究センター	鎌 田 東 二		日本文化・思想・宗教に関する宗教哲学的研究, 日本文明の比較文明的研究, 地域文化の民俗学的研究
〃	船 橋 新太郎		前頭連合野の機能に関する神経生理学的および認知神経科学的研究
総 合 博 物 館	大 野 照 文	情報発信系	貝殻成長線形成リズムについての実験古生物学的研究。二枚貝と藻類の共生についての実験古生物学的研究
フィールド科学 教育研究センター	安 藤 信	森林生態系部門	林分構造・成長の経年変化と近年のマツ枯, ナラ枯, シカ害跡地の森林再生など森林の動態・更新に関する研究
国際高等教育院	池 田 聖 子	英語教室	英語コミュニケーションの実践を基本テーマに, 討論・交渉・プレゼン・ディベート等の指導法に関する研究
国 際 交 流 推 進 機 構	森 純 一	国際企画連携部門	高等教育の国際化に関する研究 国際金融およびベトナム金融システムに関する研究

(総務部(人事課))

## 副学長事務代理が発令される

2月1日付けで副学長事務代理が命じられた。任期は平成28年2月21日まで。



法務・コンプライアンス担当  
酒巻 匡（新任）

## 部局の動き

### 医学部附属病院新病棟「南病棟」完成記念式典を挙行

医学部附属病院では、このたび災害時の対応や救急搬送、臓器移植などを想定したヘリポートを屋上に完備した新病棟「南病棟」が完成したことから、12月23日（水・祝）に完成記念式典などの記念行事を開催した。式典には学内外から120名が出席し、盛大に新病棟「南病棟」のオープンを祝った。

今回完成した新病棟「南病棟」は、糖尿病や脳卒中、腎臓病、歯周病などの生活習慣病や眼・耳・鼻や神経・骨・関節・筋肉といった感覚器や運動器の病気、さらには膠原病などの患者さんに対応する病棟となっており、記念行事は、手島英雄 文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室長、山内修一 京都府副知事、門川大作 京都市長、山極壽一 総長、湊 長博 病院担当理事・副学長、稲垣暢也 医学部附属病院長によるテープカットに始まり、その

後、施設見学が行われた。参加者は、8階にある手術室レベルの清潔度を保つ高度処置室、患者さんの生活リズムに合わせて照明の明るさが変わるサーカディアンライティングシステムを採用した病室、リハビリテーションルームなどを熱心に見て回った。

また、今回は地域住民にも新病棟が開放され、普段は立ち入ることのない真新しい病室などを見学し、担当者の説明に聞き入っていた。

引き続き、ANAクラウンプラザホテル京都で完成記念式典を挙行した。はじめに稲垣病院長が「医療の中身と環境が充実することで患者の満足が得られる。当院スタッフのモチベーションも高まっており、今後も職員一丸となって地域の拠点病院として、また、日本の中核病院として活動していきます」と式辞を述べた。続いて、山極総長が「今回の新病棟竣工はハード面が充実したものであり、今後はソフト面、職員のスキルや運営面での充実を目指して頑張ってもらいたい」と挨拶を行った。また、寺門成真 文



挨拶する山極総長



挨拶する稲垣病院長



竣工した南病棟





左から、テープカットをする湊理事・副学長、山内副知事、山極総長、手島大学病院支援室長、門川市長、稲垣病院長

部科学省高等教育局医学教育課長(代読：手島室長)、山田啓二 京都府知事(代読：松村淳子 京都府健康福祉部長)、門川大作 京都市長から、新病棟「南病棟」への期待を込めた祝辞が寄せられた。その後、平家俊男 副病院長から新病棟「南病棟」の施設概要について説明があり、式後に行われた祝賀会では、湊理事・副学長、森 洋一 京都府医師会長の挨拶の後、鏡開きが行われ、出席者は今後の医療発展や新病棟が担う役割について語り合った。

(医学部附属病院)

## 東南アジア研究所創立50周年記念式典・記念祝賀会を開催

東南アジア研究所は12月11日(金)、創立50周年を記念して、記念式典および記念祝賀会を開催した。

国際科学イノベーション棟で行われた記念式典では、河野泰之 東南アジア研究所長の式辞、湊 長博 理事・副学長の挨拶に続き、牛尾則文 文部科学省研究振興局学術機関課長(代読：岡本和久 学術機関課課長補佐)、白木澤佳子 科学技術振興機構理事、津田敏隆 国立大学附置研究所・センター長会議会長、飯塚正人 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長から祝辞が述べられた。

続いて記念講演では、元東南アジア研究所長の立本成文 人間文化研究機構長が「研究所のいのち」と題して講演を行い、研究所の半世紀の歩みを振り返るとともに、これからの50年の発展に向けての期待を語られた。

式典終了後、バリ舞踊が披露され、和やかな雰囲気であった記念祝賀会では、青山 亨 東南アジア学会長およびSunait Chutintaranond SEASIAコ

ンソーシウム代表により祝辞が述べられ、稲葉カヨ 理事・副学長による乾杯の発声とともに、和やかな歓談のひと時がもたれた。

式典および祝賀会には学内外の関係者約230名が参加し、会場では、研究所の歴史のスライドショー、ASEAN諸国の研究者からのビデオレター、現在研究所で進められている多彩な研究プロジェクトの紹介などが行われ、盛大に50周年を祝った。

なお、これに続く12月12日(土)・13日(日)両日には50周年記念行事の一貫として、東南アジア研究所主催により、国立京都国際会館にて、SEASIAコンソーシウム第一回国際会議が盛大に開催され、内外27ヶ国から約530名の参加者を得て、活発な議論が交わされた。



左から、祝辞を述べる岡本課長補佐、白木澤理事、記念講演を行う立本機構長、挨拶をする湊理事・副学長、式辞を述べる河野所長、挨拶をする稲葉理事・副学長



バリ舞踊の披露

(東南アジア研究所)



## 寸言

自由な学風を謳歌しながら、  
幅広く社会にも目を向けよう

高松 富也

1999年9月29日、京大硬式野球部が何年かぶりに関西学院大学から勝ち点を奪った。その場に自分もいたことが学生時代でいちばん記憶に残っていることかもしれない。



京大入学当初、それまで京大合格が大きな目的だったので、入学するとその目的を失ってしばらく無為に過ごしていた。そのうち、野球は二度とやるまいと思っていたのに、予備校時代の友人に誘われるがまま野球部に入部した。以降、それなりに野球には打ち込んだが、高校野球で燃え尽きた感を最後まで拭えずに、大学では最後まで大した活躍もできなかった。ついでに、勉強もいい加減だったので、決まっていた就職先を辞退して留年。最後の一年は無駄に過ごしたような感じで、なんとなく卒業してしまった。

今思うと、少々もったいない学生生活を送ったものだとも思う。もっと違ったことをやれば良かったとの後悔もある。ただ、充実していたとは言い切れないが、自由気ままに学生時代を過ごすことができた。それができたのは京大の自由な学風と、学生に寛容な京都という街の雰囲気のおかげなのだろうと思う。もう一度やり直して良いと言われても、たぶん大差ない学生生活を送るだろう。

再び京大を身近に感じるようになったのはここ数年のこと。我が社の採用試験やインターンシップで京大生と接する機会が増えてきた。過去の感覚からすると、我が社のような発展途上な企業に京大生が興味を持つのは珍しい、と思っていた。京大生の就職先は、大体が名の知れた超大手企業や官庁へ、というのが私の勝手なイメージだった。また、先に触れたような京大を取り巻く素晴らしい環境のおかげもあって、京大生は社会や企業との接点が少なく、他の学生と切磋琢磨することも少ない、というの

ずっと感じていたことであるし、少なくとも自分はそんな学生だった。

しかし、この点においては、最近は少し様子が変わってきているように感じている。総長の掲げるWINDOW構想には大いに共感する。昨今、京大が卒業生や企業とのつながりを増やそうとしている取り組みもとても良いことだと思う。

一方の我々企業も、その流れに応じて今まであまり出来ていなかった情報発信や学生支援などに取組みたいと考えている。

今、日本の企業は大きな変革の時期を迎えている。企業を取り巻くルールや国境を超えて競争環境が劇的に変化していくなかで、あらゆる企業が新たな成長に向けて舵を切りはじめている。我が社もこの変化をチャンスと捉え、既存の枠組みや国境を超えたダイナミックなチャレンジで次なる成長に向けて大きな一歩を踏み出している。これからは大企業だからと言って将来安泰という時代ではない。規模の大小に関わらず、我々のようなチャレンジングな企業がたくさんあることを、京大生にもっと知ってもらいたい。

変革の実現のためには、自由な発想を持った、多種多様な人材が必要だと考えている。まさに京大生の気質が生かされるところではないだろうか。

是非、これからも京大生には自由で素晴らしい学風を謳歌しながらも、今まで以上に社会や世界に対して、また様々な企業に対しても目を向けてもらいたいと思う。そして我々もそのための機会を増やしていきたい。自らの学生時代に思い残した念も込めて、今の学生に少しでも視野を広げ、将来の選択肢を増やす機会を提供できればと願っている。

もちろん、企業に就職するだけが将来の選択肢ではない。昨年、京大初のプロ野球選手となった硬式野球部の後輩である田中英祐君は、まさに自らの能力を磨き、新たな道を切り開いた一人であろう。最後にこの場を借りて彼の今後の活躍にエールを送りたい。

(たかまつ とみや ダイードドリコ株式会社代表取締役社長、平成13年経済学部卒業)

## 随想

## 「はたらき」の尊厳さ

京都大学名誉教授 本山 美彦

近年のIT技術の採用によって、労働の喜びが労働現場から急速に失われてきています。経済学はそもそも、労働のもつ人間としての喜びを見出そうとしてきたものでした。しかし、現在、労働者が単なるコストとして位置付けられるようになったことへの危機感が現役の経済学者に希薄になっているような気がしてなりません。



まだ間に合う。悲惨な事態が社会を覆う前に、経済学の方角性を先人たちが追い求めてきた方向に向き直させることが大切だと思います。

そこで、「労働」という言葉のすばらしさから話の紐を解きましょう。

「労働」という言葉は、国字、つまり和製漢字です。「峠」という字と同じです。これは、日本の豊かな感性の表れだとの思いで、私は「働く」という字が好きです。

昔から、「働く」という字はありましたが、もっぱら、「はたらく」と、「ひらかな」が使われていました。和製漢字を使い出したのは、比較的最近で明治に入ってからだという研究があります。

「つとめる」、「せいだす」、「わざを見せる」等々、人の役に立つ意味が込められているのです。

なんて素晴らしい日本人の心がこの言葉にこめられていることでしょう。

たとえば、女性の労働。男子並みの賃金を獲得することが女性の権利・義務だと、いまは、多くの人に理解されています。もちろん、不当な賃金差別は是正されるべきでしょう。しかし、労働のすべてを賃金に換算してしまう「ものの見方」は、人の「はたらき」の喜びを無視してしまっているのではないのでしょうか？

それに比べて、昔の女性の「はたらき」は、生活と一体のものでありました。柳田國男『明治大正史、世相編』には、生活と一体であった女性の「はたらき」が称賛されていました。

「女は男とともに正式に働いた。女性が労働に携わると家庭が壊れはせぬかという心配はむしろ杞憂である。機(はた)の上手な八丈島の女性の働きは男の仕事の補充ではなかったのである」。「海女の働きは驚異であった。……朝起きると洗濯や炊事をなし、それから田畑に出て、昼からは海に行って鮑や海藻類を採取し、夕には家に帰って家事・裁縫、子供の世話から、村の寄合いや工事に至るまで……出るという非常な働きに堪え、海に出ている夫を助け一家を支えて居るのである。夫は始終海にいて世間がわからぬというので、婦人が村会に出席している所さえもある。一体に海浜の女性は非常に労働に従事した」。

仕事、家事、子育て、さらに集落の会合と、なにからなにまで、朝から夜寝るまではたらい回し。女性にとって「生活すること」と、「はたらく」とは分けられない営みとしてあったのです。これを男性社会が、女性に苛酷な労働を押し付けていたと取るべきでしょうか？ 現在の閉塞社会を打ち破る芽は、昔は確かにあった人間の「はたらき」を復活させることではないのか。「職業婦人」の範疇を超えた「生活婦人」の復活を私は夢見ます。

現在は、労働が危機にさらされています。ITのとてつもなく速い技術進歩によって、あらゆる部門で「生きた」人間の労働が失われています。

それだけではありません。製品のライフサイクルが極端に短くなり、製品価格の値崩れだけでなく、労働者の熟練の機会を奪ってしまっています。

バランスの取れた経済社会の構築方法を一刻も早く見出すことが非常に重要になっています。

(もとやま よしひこ 平成18年退職、国際経済労働研究所理事長、元経済学研究科教授、専門は世界経済論、とくに金融権力)

## 洛書

## 研究生活における時間の使い方

木野村 淳

今から20年ほど前に、当時所属していた研究機関からの派遣研究員として、オーストラリアの大学で1年間研究する機会を頂きました。派遣先の大学に到着し、住まいを含めて生活に必要な様々な手配が終わり、下手な英語で周り



の方々意思疎通を計りながら何とか研究生活を始めることができました。私の所属した部門には、私を受け入れて下さった責任者の先生と、副責任者の先生がいらっしゃいました。お二人ともその当時の私の研究分野で世界的に名前を知られた方々です。ところが、副責任者の先生は夕方5時過ぎると帰宅されます。責任者の先生は管理の仕事が多いのでしょうか、もう少し遅くまでおられるのですが、それでも6時位には帰宅されます。また、午前10時と午後3時には、他の部門の方々も含めて、建物中央の共通スペースに集まってきてお茶を飲みながらおしゃべりをする時間が毎日あります。長くしゃべっていると1時間位すぐに過ぎてしまいます。朝9時に来て、お茶の時間以外にランチに1時間使い、夕方5時に帰れば、ほとんど何もできない、と思ったものです。しばらくして、実験を開始したのですが、要領が悪くて夕方6時頃になっても実験が終わらないと、皆帰って周りに誰もいなくなり、フロアは暗くなります。私の実験の世話をしてくれた大学院生の方が、日本ならまだ早い時間なのですが、「アツシ、働きすぎだよ」と心配顔で気遣ってくれるのです。

例えば、オーストラリアに行く前の私は、夕方から本番とばかり、夜は遅くまで仕事をして、翌朝は眠い目をこすりながら研究室に出てくる毎日でした。土日に研究室にいても誰も不思議に思いませんでした。そのようにして、毎日毎日頑張ったつもりなのですが、なかなか思うように研究は進みませんでした。それでも、それが当たり前だと思っていま

した。

このような状況だったので、日本との働き方の違いに驚きました。私の経験したことはたまたま私が派遣された大学だけの一部の事情とは思えません。部門の先生方は外国出身か、国内出身であれば若い頃にヨーロッパや北米の研究機関で修行しておられます。何より間近におられる先生方が、夕方帰宅しても世界で通用する業績を挙げていることを知っています。

何故夕方早い時間に帰って最先端の仕事ができるのか、その頃からずっと考えています。未だにきちんとした答えは出ていません。ただ思い当たることはいくつかあります。まずは会議が小規模なのです。私は日本の大学を出ていますが、その出身研究室ではよく全員が集まって長い時間をかけて研究進捗状況の報告会をしていました。一方、私の所属したその部門では担当者(学生や研究員)と指導者が、自室で、1対1か少人数で済ませてしまうことが多かったと思います。次に技術職員の層が厚く、機械工作、電子回路、コンピュータなどの専門支援チームに加えて、部門付の職員が複数おられました。装置の故障や、ちょっとした研究上の困りごとは、早ければその日のうちか、2、3日で済んでしまうことが何度かありました。他にも、実験に必要な機材が学内ですぐ入手できること、部門の事務を担当する秘書が優秀であることなど、思い当たる事はあります。そもそも、皆が朝9時に来て夕方5時に帰るのんびりした生活を送っているように見えますが、本当に必要な時には、お茶の時間は短く済ませ、あるいは人知れず早朝や時には休日に仕事をしている人がいることも後から知りました。

あれから年をとって、自分が管理に関わる立場になって、研究に割く時間の問題がどれほど解決されたか、どれほど解決できるか考えると、心もとない気持ちになります。まだまだ追いついていないのです。どうしたら良いのか今後も考え続けることになりそうです。

(きのむら あつし、原子炉実験所教授、専門は材料照射効果)



## 栄誉

## 竹内 理 ウイルス研究所教授が日本学士院学術奨励賞を受賞

このたび、竹内 理 ウイルス研究所教授が日本学士院学術奨励賞を受賞され、授賞式が2月24日(水)に日本学士院で行われた。同賞は日本学術振興会賞受賞者の中から、毎年6名以内に授与するものである。以下に同氏の略歴、業績等を紹介する。

竹内 理 教授は、平成7年3月大阪大学医学部を卒業、同年大阪大学医学部附属病院臨床研修医、同8年大阪府立病院研修医、同12年日本学術振興会特別研究員・DC採用、同13年大阪大学大学院医学系研究科博士課程を修了し、同年医学博士の学位を授与された。同14年ハーバード大学博士研究員、同16年大阪大学微生物病研究所助手、同19年に同准教授、同24年に京都大学ウイルス研究所教授となり、現在に至っている。

同教授の受賞研究テーマは「自然免疫における炎症調節分子機構の解明」である。

自然免疫は感染防御に重要なシステムである。同教授は、異なる病原体認識受容体が異なる病原体の分子パターンを認識することを発見し、自然免疫に



おけるパターン認識とその多様性という概念の誕生に寄与した。さらに同教授は、自然免疫調節機構を研究し、mRNA分解による自然免疫応答制御とそれに関与する新規酵素を発見しRegnase-1と名付けた。加えてRegnase-1とRoquinが時空間的に異なるmRNA分解メカニズムにて協調することで抗病原体免疫応答を調節するという新しい免疫応答制御機構を発見している。

同教授の研究成果は、病原体に対する感染防御機構解明に向けた重要な基盤を提供するものとして独創性と新規性が国際的に極めて高く評価されているばかりでなく、自然免疫システムが多くの炎症性疾患に関与することから、新しい炎症調節機構として世界から広く注目されており、竹内教授の今後の益々の発展が期待される。

(ウイルス研究所)

## 植村卓史 工学研究科准教授が日本学術振興会賞を受賞

このたび、植村卓史 工学研究科准教授が日本学術振興会賞を受賞され、授賞式が2月24日(水)に日本学士院で行われた。以下に、氏の略歴、業績等を紹介する。

植村卓史 准教授は、平成9年3月京都大学工学部を卒業、同14年3月同大学院工学研究科博士後期課程修了、日本学術振興会特別研究員を経て、同14年8月京都大学大学院工学研究科助手に採用、同19年4月同助教、同22年7月に同准教授となり、現在に至っている。

今回、受賞の対象となった研究業績は「ナノ空間を利用した精密重合法の開発と特異な物性発現」である。高分子の構造や集積状態を精密に制御できる手法の開発は、われわれの生活を豊かにする新しい高分子材料の創出につながり、高分子化学や材料化学における大きな研究課題の一つとなっている。同准教授は、金属イオンと有機配位子を精巧に組み合



わせることで、ナノサイズの規則的な空間を有する金属錯体型反応容器を独自に構築した。このナノ空間内で種々のモノマーを重合することで、従来法では困難であった立体規則性、反応位置、配向状態などが精密に制御された高分子材料を産み出すことに成功した。また、ナノ空間内に高分子鎖を拘束することで、今まで未開拓であった単分子鎖から数本鎖の高分子集合体を示す物性も明らかにし、導電性の飛躍的な向上やガスセンサーへの応用にも成功している。

本研究における斬新な発想と広い適用範囲は機能性高分子材料を創製する全く新しい方法論として革新をもたらし、産業界にも大きなインパクトを与えていることから、国内外を問わず非常に高く評価され、今後のさらなる発展が期待されている。

(大学院工学研究科)



## 松本 紘 前総長がフランス共和国レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエを受章

松本 紘 前総長がフランス政府からレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエに叙され、12月18日(金)にフランス大使館公邸(東京都港区)で、ティエリー・ダナ 駐日フランス大使臨席のもと、叙勲式が執り行われた。

レジオン・ドヌール勲章はナポレオン・ボナパルトによって1802年に創設されたもので、経済、文化交流の発展への功労者等に与えられる最高の榮譽をしめす由緒ある勲章である。

先生は、昭和40年京都大学工学部電子工学科を卒業、同42年に同大学大学院工学研究科修士課程修了後、京都大学工学部助手、助教授、同大学超高層電波研究センター助教授を経て、同62年に教授に就任。その後同センター長、宙空電波科学研究センター長、



生存圏研究所長等を歴任した後、平成17年に理事・副学長、同20年10月に第25代京都大学総長に就任し、大学の管理・運営に尽力された。退任後の同27年4月に理化学研究所理事長に就任し、現在に至っている。

専門分野は宇宙プラズマ物理学、宇宙電波科学、宇宙エネルギー工学で、これまでにGagarin Medal、文部科学大臣表彰科学技術賞、紫綬褒章、Booker Gold Medalなど数々の榮譽を受けてこられた。

このたびの受章は、平成25年10月に本学とフランス国立科学研究センター(CNRS)が研究協力協定を交わしたことや、国立大学協会長として同26年5月に日仏間学位・単位相互認証協定を結んだことが日本とフランスの2国間の学術発展に寄与したとして、評価されたものである。

(総務部(総務課))

## 話題

### 医学部附属病院新病棟「南病棟」ヘリポートで患者搬送訓練を実施

医学部附属病院では、このたび災害時の対応や救急搬送、臓器移植時におけるヘリでの臓器搬送などを想定したヘリポートが新病棟(南病棟)屋上に完成したことから、12月18日(金)に京都市消防局の協力を得て、京都市消防航空隊の消防防災ヘリ「ひえい」号による離着陸訓練並びに患者搬送訓練を実施し、報道陣に公開した。

当日は、医学部附属病院と京都市消防局から約50名の関係者が参加し、新たに完成したヘリポートへ

の進入経路の確認や着陸後の医学部附属病院職員との連携、そして患者搬送専用エレベーターを使用しての患者搬送の手順やルートの確認を目的に実施した。

医学部附属病院にヘリポートが完成したことにより、高度な医療を今まで以上に広い地域に提供できる環境が整った。訓練は平成28年2月にも実施し、同月から運用を行っている。



新病棟「南病棟」に完成したヘリポート



患者搬送訓練の様子

(医学部附属病院)

## 宇治地区新年互礼会を開催

宇治地区では1月4日(月)、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースで新年互礼会が開催された。宇治キャンパス各部局の連携促進と構成員間の交流を深めることを目的に毎年開催されており、各部局の教職員に加え、事務部職員も加わり、宇治地区の一体感をより高める機会となっている。



左から新年の挨拶を述べる寶所長、乾杯の音頭をとる渡邊副所長

開会にあたり、宇治地区世話部局長である寶馨防災研究所長より新年の挨拶があり、続いて、次期宇治地区世話部局となる生存圏研究所の渡邊隆司副所長の発声による乾杯の後、出席者は銘々に歓談し、新年を迎えた実感と賑やかな雰囲気の中で盛会のうちに終了となった。



会場の様子

(宇治地区事務部)

## 京都大学パートナーシップオフィス(マヒドン大学)開所式および留学セミナーを開催

地球環境学堂は、1月11日(月・祝)、京都大学パートナーシップオフィス(マヒドン大学)開所式と留学セミナーをタイのマヒドン大学にて開催した。

11日午前に行われた開所式は、Jakrit Suthakorn マヒドン大学工学部長からの歓迎の挨拶と参列者の紹介があり、その後、藤井滋穂 地球環境学堂長か

ら本オフィスの役割と概要説明が行われた。また、本事業で進められた本学初のクロスアポイントメント制により採用された教員(京都大学とマヒドン大学の両者に所属する教員)への辞令交付式などのセレモニーも行われた。その後、寺島史朗在タイ日本国大使館一等書記官から、国際化とモビリティの



集合写真



高まりと本事業への期待と祝辞を、山下邦明 JSPSバンコク研究連絡センター長から、平和の下でのアジア地域における学術の発展の願いとともにお祝いのメッセージをいただいた。併せて、パートナーシップオフィスの先駆けであるハノイ理工科大学のHuynh Trung Hai 科学技術部部長からは、パートナー間も含む相互協力の発展とお祝いの言葉を、柴山 守 ASEAN拠点教授からは、今後の教育・研究の発展への協力・連携についてのメッセージをいただいた。

最後に、Banchong Mahaisavariya マヒドン大学副学長から、祝辞をいただくとともに、このパートナーシップを基に、医学分野を中心とする他分野における京都大学との連携に向けた力強いメッセージ

をいただいた。また、本開所式にあたっては、ビデオカンファレンスシステムを用いた協定大学4校(マヒドン大学(ホスト校)、ハノイ理工科大学、ポゴール農業大学、京都大学地球環境学堂)も参加し、各大学から祝辞をいただくとともに、今後のビデオカンファレンスシステムの活用と各大学の連携についての確認を行った。

引き続き行われた留学セミナーでは、地球環境学堂、農学研究科、工学研究科、医学研究科社会健康医学系専攻が紹介を行い、多くのマヒドン大学の学生が参加し、本学への留学やマヒドン大学での進学に関する情報に聴き入っていた。

(大学院地球環境学堂・学舎)

## 講演会および施設公開「スーチャーさんと京都」を開催

東南アジア研究所において12月18日(金)、京都大学ASEANウィークの一環として、「スーチャーさんと京都」と題する、一般市民を対象とした以下のイベントを開催した。

### ①講演・座談会「スーチャーさんと『ビルマ』の今」

アウン・サン・スー・チャー女史一家と40年来の交流があり、「アウンサンスーチャーへの手紙」の著作がある大津典子さんと、中西嘉宏 東南アジア研究所准教授による講演・座談会「スーチャーさんと『ビルマ』の今」を開催した。ミャンマー政治研究の専門家である中西准教授による同国の現状の解説のあと、大津さんからは若き日のスー・チャー女史や家族のこと、内面を窺い知ることのできるエピソードなど、親しい友人ならではの貴重なお話を披露いただいた。



講演・座談会の様子

### ②「アウンサンスーチャー・ルーム + 東南アジア研究所図書室見学会」

「アウンサンスーチャー・ルーム」は、スー・チャー女史が東南アジア研究所に1985年10月から9ヶ月間、客員研究員として滞在したときに使用した研究室である。1992年に開設され、当時は軍政下において軟禁状態にあった女史の早期解放を願い、現在も女史のノーベル賞受賞を讃えて女史ゆかりの品や関連資料などを保管している。

参加者は、アウンサンスーチャー・ルームおよび東南アジア研究所図書室に展示されているスー・チャー女史の著作や関連図書、ノーベル賞関連資料、京都時代の写真などを閲覧した。



アウンサンスーチャー・ルーム

(東南アジア研究所)

## 国際会議 SEASIA 2015を開催

東南アジア研究所は、創立50周年の記念イベントとして12月12日(土)・13日(日)、アジアにおける東南アジア研究コンソーシアム(SEASIA「シーエイジア」)の立上げとなる国際会議を開催した。

SEASIAは、東北アジアと東南アジアにおける10の地域研究を先導する研究機関によって、地域発の東南アジア研究の振興を目的として、2013年10月に創設された。東南アジア研究所は、その日本代表であり、現在、コンソーシアムの事務局を担っている。

国立京都国際会館にて、12日(土)に開催された開会式では、山極壽一 総長、Sunait Chutintaranond SEASIA運営委員会議長の挨拶の他、福田康夫 元内閣総理大臣、下山雅也 国際交流基金アジアセンター部長からの来賓スピーチをいただいた。続いて、Wang Gungwu シンガポール国立大学ユニバーシティ・プロフェッサーおよびPasuk Phongpaichit チュラーロンコーン大学教授による基調講演が行われ、参加者は熱心に聴き入っていた。

また、2日間に渡って開催された国際会議では、



左からスピーチを行う福田元総理、基調講演を行うWang教授、Pasuk教授、スピーチを行う下山国際交流基金部長、挨拶を述べる山極総長

79個の分科会が立ち上がり、492の研究発表が行われ、活発な意見交換が行われた。ASEAN10カ国と東ティモールを含む27カ国からの参加者約530名を得た国際会議SEASIA2015は、東南アジア研究の振興を目的とする地域発の試みとしては、これまでで最大級の規模の会合となった。

東南アジア研究所では、この会議での発表論文から選ばれたものを、SEASIAの公式ウェブサイト(<http://seasia-consortium.org/>)にて、ワーキング・ペーパー・シリーズを通じて、公表を行っていく他、研究所の主管する英文叢書シリーズKyoto CSEAS Series on Asian Studiesなどへのテーマ毎の編著としての投稿や、英文学術誌Southeast Asian Studiesでの発表を進めていく予定である。



会場の様子

(東南アジア研究所)

## 湊 長博 理事・副学長が第13回佐川特別賞を受賞

このたび、湊 長博 理事・副学長が第13回佐川特別賞を受賞し、平成27年12月5日(土)にホテルグランヴィア京都において授賞式が開催された。

佐川特別賞はがんの研究に顕著な功績を挙



贈呈されたブロンズ像「希望」と湊理事・副学長

げ、かつ今後の発展が期待される者に対し送られる賞であり、今年度は湊理事・副学長と坂元亨宇 慶應義塾大学医学部教授の2名に贈られた。湊理事・副学長の受賞理由は「ガンに対する免疫応答機構の解明とガン免疫療法の開発」で、この研究により、がんの新規かつ有効な治療法の進展に寄与したことによるものである。

(総務部(総務課))



## 訃報

このたび、清永敬次<sup>きよながけいじ</sup> 名誉教授、早石<sup>はやいし</sup> 修<sup>おさむ</sup> 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介いたします。

## 清永 敬次 名誉教授



清永敬次先生は、12月16日に逝去された。享年84。

先生は、昭和28年京都大学法学部を卒業された後、同大学院法学研究科を経て、同33年京都大学法学部助教授に採用され、同45年同教授に昇任された。平成7年、停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和56年4月より同58年4月まで、京都大学評議員として、学内行政に尽力された。本学退官後は、平成14年まで、近畿大学法学部教授を務められた。

先生は、京都大学法学部の租税法講座を専ら担任する初めての教授として、租税法全般にわたる研究

をされ、租税法の学問としての確立と発展のために尽くされた。また、一貫して租税回避に関する研究を進められ、学界に多大な影響を与え続けられた。その研究成果により、平成7年には、京都大学博士(法学)の学位を取得された。学外においては、政府税制調査会特別委員、国税庁税理士審査会懲戒審査委員、国税審議会懲戒審査委員、大阪府地方税財政制度研究会委員などを歴任され、日本税法学会理事長、租税法学会理事を務められるなど、わが国の租税財政制度および学界の発展に大きく寄与された。これらの功績により、平成23年春に、瑞宝中綬章を受けられた。

(大学院法学研究科)

## 早石 修 名誉教授



早石 修 先生は、12月17日に逝去された。享年95。

先生は、昭和17年9月に大阪帝国大学医学部を卒業後、大阪帝国大学医学部副手、助手を経て、同29年12月から米国立健康研究所毒物学部長を務められた。またその間、同24年7月には大阪大学にて医学博士を取得された。同33年3月に京都大学教授に就任され、同58年4月に京都大学を停年退官されるまで25年間にわたり医学部医化学教室第一講座を担当された。加えて、同54年12月から同56年12月まで京都大学評議員、医学部長の要職を歴任され、本学の運営に尽力された。退官後は大阪医科大学長を経て、同62年7月から平成10年9月まで財団法人大阪バイオサイエンス研究所長に就任、同16年4月より同研究所理事長を務められた。

先生は、永年にわたり生化学、特に酵素学の領域で極めて顕著な業績を挙げられた。その中でも酸素添加酵素の発見は、1920年代以来の生体酸化の脱水素説をくつがえす生化学の歴史上画期的な研究であり、「生体における酸素の活性化及び活性酸素」の概念を打ち立てた特筆されるべきものである。この発見に続くトリプトファン代謝経路の研究、NADによるADP-リボシル化及びポリADP-リボシル化反応の研究から先生の最後の大仕事であるプロスタグラ

ンジンの生合成と生理活性を通した睡眠の生理機構の研究に至るまで、生化学の王道を常に歩まれた。

同時に先生は後進の指導や学生の教育にも心血を注がれ、「早石道場」と呼ばれたランチセミナーでの徹底的な討論をはじめとする厳しい指導から、世界的に著名な生化学・分子生物学者が多数輩出された。

先生の研究や教育の業績は国内外で極めて高く評価され、昭和42年5月日本学士院賞、同50年6月藤原賞、同54年5月スペインヒメネズ・ディアズ賞、同61年イスラエルウルフ基金賞等多数の権威ある賞を受賞された。さらに酸素添加酵素の発見と研究に対し、同47年11月に文化勲章を、平成5年5月に勲一等瑞宝章を受章された。

また先生は、昭和43年度日本生化学会会長、同48年から同51年まで国際生化学連合総裁、同56年から同58年までアジア・オセアニア生化学連合総裁を歴任し、加えて日本学士院会員、アメリカ合衆国国立科学アカデミー外国人会員、ドイツ学士院会員等として活躍された。

私人としての先生は、ゴルフと美食をこよなく愛するおしゃれな紳士であった。殊に食に関しては、最高の料理やブルゴーニュの赤ワインを楽しまれるだけでなく、食の歴史や文化に対して専門家を凌ぐほどの深い知識と見識をお持ちであった。

なお、偲ぶ会は平成28年6月18日(土)15時30分から百周年時計台記念館で開催される予定である。

(大学院医学研究科)